

## チャンスをつかみ、つかまれる

(ルカ一九・一〜一〇)

「大きな成果を出す人は、問題にはなく、機会に集中している。」これは伝説の経営学者ピーター・ドラッカーの名言である。大きな成果を出そうとするならば、ネガティブをちまちま埋めるだけではだめだ。もっと根本的な変化をもたらすチャンスを見つけ、それをつかまなくてはならない。しかしこれは新しい真理ではない。むしろ昔から言われていたことだ。ギリシャ神話の神、カイロスの姿を見よ。チャンスの神である彼には前髪しかない。だから通り過ぎた「彼」を捉えることは出来ない。引つ張ろうにも、引かれる「後ろ髪」がないのだ。笑。

先ほど読んだ聖書箇所にはイエスと出会い、新しい人生を生きるチャンスをつかんだ人のことが書かれている。以下イエス・キリストについて二つのことを学びたい。

## 一、人生を変える「イエス」

聖書はこのザアカイを「取税人のか

しらで金持ちであった」と描写しているが、物語を読み進めていくと、彼の蓄えた資産は罪の結果であった。彼はまた自らはユダヤ人であるにも関わらず、ローマ帝国の手先になって徴税に明け暮れていた。そんな彼が仲間達から嫌われるのは必定。有り余るお金と裏腹に孤独な生活を送っていたものと容易に推測できる。人間関係をしっかりと構築しておれば少なくとも多くの人にさえぎられるということも無かったはずだ。しかし彼はなんとしてもイエスという男を見たかと思つた。そしてなんといちじく桑の木に登り、そこからイエスを見たのである。そんなザアカイにイエスは声をかけた。しかも彼を名前前で呼んだ。面白いのは彼の名前の意味である。ザアカイとは「清い」という意味。日本流に言えば「清」である。でも実際の彼は不正、不義にあふれた男であった。しかしイエスはそんな彼を名前前で呼び、「きよしよ、降りて来なさい」と声をかけられたのでした。それが彼の変革のはじまりであった。

## 二、チャンスを得させる「イエス」

さてここですこし時間を巻き戻してみよう。群衆に遮られたザアカイは木に

登つてもイエスを見ようとした訳だが、こうした行動はかの地ではありえないことであった。中東の文化ではいい大人は走つたりしない。ましてや木登りなどもつてのほか。しかしザアカイはイエスを見たいという一念で短い手足を伸ばし、高級な着物を台無しにするのを惜しまず、また小馬鹿にする人の声には耳も貸さずに木に登り、遂に絶好の場所を見つけた。その時である。彼の耳に驚くべきことばが聞こえてきた。「、今日は、あなたの家に泊まることにしてある」。原文直訳では「今日私はあなたとここに泊まる必要がある」だ。ここにあるのはイエスの主体的な意志である。確かにザアカイは自らイエスに出会おうとした、チャンスをつかもうとしたのだが、この意思を見るとイエスが彼を捕らえたともいえる。「人の子が来たのは失われたものを尋ね出して救うためである(九節)」にある通りだ。誰もがリスベクトし、友になりたいと願っているお方が自分のような不屈き者の名を呼び、食事をし、友となつてくれる。イエスの愛とやさしさに触れた時、売国奴かつ守銭奴のザアカイの心は解け、イエスの前で罪を悔い改め、名前通り人生、すなわち清い人としての人生に向かつて歩み出したのである。ハレルヤ!

\* \* \*

海洋国家として栄えた一八世紀のイギリス。船乗りを父に持った彼は一八歳の時に半ば拉致されるように徴兵された。四年間の軍隊生活の後、彼は父と同じく船乗りになった。しかし彼が乗船したのは奴隷貿易船であった。奴隷を使役し、辛く当たる。こうした生活の中、彼の心は非常にすさんだのだが、そんな時、彼は一冊の本を手に取ります。タイトルは「イエス・キリストに従う生き方」。彼は「神なんかいるわけがない」と思いながら読み始めたが次第にその本に感化を受けるようになった。そしてある晩のこと。彼の船が事故で沈没しそうになった。必死の排水活動の最中、彼の脳裏には今までの人生のシーンが走馬灯のように浮かんで消えた。神の否定、人への憎しみ。自分の罪がいやと言うほど示され、彼はそこで悔い改めた。幸い船は沈まず、それから一転彼は伝道者となった。その名もジョン・ニュートン。『アメイジング・グレース』の作詞者である。ザアカイも、ニュートンもイエスに出会い、チャンスをつかみ、つかまれた。イエスは今日もあなたを名前前で呼び、終生の友となろうとしておられる。友よ、あなたはどうか。